

# 夏休み体験 インドとネパール バックパッカーの旅

## 強い生命力と穏やかな表情

夏休みを利用して、バックパッカーとしてインド、ネパールを1カ月間旅した英尚樹さん(商2)の体験記を紹介する。



▲ 世界遺産のタージ・マハルをバックに英さんをバックに英さん



すると「チケットがなからチケットをもっている人のところに座った」。

◇「猛烈な川」ガンジスで沐浴

8月9日、ベンガル州を網の目のように流れる大河ガンジスの川に立つ。聖なる川とて変わって街は穏やか。気候も涼しいというよりは肌寒いくらいであった。インドを離れ、バスを利用してネパールへ向かう。ダーズリンからネパールの首都・カトマンズへは丸一日かかった。

### 英 尚樹(商2)

◇デリーからピンクシティへ

8月3日早朝に成田空港から出国、同日の夜にインドの首都デリーに到着。

空港内のロビーに出ると、そこには観光客を狙うインド人の客引きが100人以上待ち構えていて、片言の日本語で近寄ってくる。何度振り払ってもしつこく付いてくるため、市内行きのシティバスに駆け込んだ。約1時間後、真っ暗闇の右も左も分からない停留所で降ろされた。果たしてインドはどんな国なのか、不安とともにどんな出来事か待っているのか楽しみになった。

翌朝バスで、周囲10時の赤い城壁に囲まれていることから「ピンクシティ」と呼ばれるジャイプール(デリーの南西約260km)へ向かう。ヒンズー教のお国柄で、街のいたる所に牛がいて道路や交通機関にも影響を与えていた。そして次の目的地、世界遺産として有名なタージ・マハルがある都市、アグラへ向かう。



▲ インドのバラナシで人々はガンジス川に身を沈めて沐浴をしている光景も

◇ヒンズー教の聖地バラナシへ

8月6日、アグラ到着。1泊200円のゲストハウスに。翌日、タージ・マハルを訪れた。白い大理石の立派なお墓だ。バックパッカー生活8日目、寝台列車で約12時間かけて、人「チケットを持っていないという生観が変わるといわれるバラナシに、なぜ私の足に座ったのか」。

私はこのようなガンジス川に美しく神秘的なものを感じた。

翌朝、ガンジス川のほとりを訪れた。沐浴をしているインド人。居ても立ってもいられなくなった私は、まるでガンジス川に呼ばれているかのように、裸になり川に身を沈めた。足元は泥で水は生臭い。朝日を背中に身を沈めた瞬間、インドすべてがこの川に詰まっているような一瞬不思議な感覚にとらわれた。ほとりには火葬場が設けられており、炎の中に次から次へと遺体が投げ込まれていた。まるで廃棄物のような扱いだ。川を離れ、道を歩くと、いたるところに、孤児や老人、手足を失った人々が、生きていくため

に必要なお金、食べ物求めて必死に物乞いしている。この地を訪れ、私は強い生命力を感じた。同時に、今ここに生きていく素晴らしさを身体で感じた。

◇陸路でカトマンズへ

8月14日、バラナシから寝台列車とジープに乗ってダーズリンに到着した。バラナシとは打って変わって街は穏やか。気候も涼しいというよりは肌寒いくらいであった。インドを離れ、バスを利用してネパールへ向かう。ダーズリンからネパールの首都・カトマンズへは丸一日かかった。

## ガンジス川はインドそのもの



▲ ゲストハウスからガンジス川を臨む＝バラナシ

い道路すらあった。また、車内の客引きと比べて強気ではなく、本場に「ネパールらしさ」を感じられ、人々も森と湖など豊かな自然に囲まれて生活しているため穏やかで優しい。こうした印象をもったのは、過酷なインドの旅があったからだろうか。湖では裸ではしゃぎまわる子供たちの素敵な笑顔や、家族そろって洗濯物をしている様子を見て、気持ちがほっこりした。

18日、ようやくカトマンズは都市化が進んでいて、雄大な景色や牧歌的な風景を見ることはなかった。バス降りた瞬間、再約6時間かけて首都から求力客引きがやっらへ向かった。この街には特に観光名所といったところはない。

そらって洗濯物をしている様子を見て、気持ちがほっこりした。日本では考えられない生活を強いられるのに、発展途上国の人々はみな笑顔で幸せそう。このような光景はネパールに限らずインドや今まで訪れた各国にあった。人間にとつての幸せって果たして何なのか…。

混沌と秩序、貧しさと豊かさ、伝統と近代化など、日本を離れてこの旅でインドとネパールの地に身を委ねることで、私はいろいろと考えることができた。日本はこれらの国と明らかに異なるが、やはり素晴らしい国であることも再確認したのだ。



▶ 子どもたちの笑顔＝ネパールで

## 貧しさと豊かさ、伝統と近代化に「幸せ」を考える

日本はこれらの国と明らかに異なるが、やはり素晴らしい国であることも再確認したのだ。

## 外国語のススメ LL研究室

—●15●—  
ドイツ語

西口 拓子 経営学部准教授

すっかり日も短くなる11月末に、各地でクリスマスマーケットが始まります。街には電飾の、室内にはろうそくの光があふれ、外は寒くても気持ちが温かくなります。

ドイツのクリスマス(アドヴェント=待降節)は、イブから4週間前の日曜日に始まります。毎週日曜に点



▲ ドイツのクリスマスリースはドアに飾るのではなく、テーブルの上に置く(12月25日撮影)

## ドイツのクリスマス～冬の旅のススメ

するうそくを1本ずつ増やして、クリスマスが来るのを待つのです。

アドヴェントの期間に欠かせないのが、クッキー作りです。何人かで集まって作ることが多く、イマドキの学生たちと一緒に焼いた時は、ネット上にあるレシピをパソコンで見ながら作りました。一度にたくさんのクッキーを焼き、各自が持ち帰ったり、他の人にプレゼントしたりします。

クリスマスマーケットには、ツリーのオーナメント、ろうそく、手工業品をはじめ、ソーセージ、釜焼きの黒パン、レープクーヘン、ナッツのお菓子、チョコレートなどの屋台が並びます。そして、甘い香りが人々を誘惑します。名物は、香辛料と砂糖を入れて温めたホットワインで、これを飲むと寒さも忘れることができます。ホットワインのカップは、デポジット制ですが、記念に持ち帰る人も多く、有名なマーケットでは、年号入りのものがあり、買い揃えたくくなります。寒いけれど、光があふれて美しいクリスマスマーケットは、一見の価値があります。ドイツ旅行をするなら、ぜひこの時期に！

\*24、25日の過ごし方とカラー写真は、LL研究室のHPで。